

## マザー＝テレサとキエルケゴール －神の不在とイエスの遍在－

中里 巧

### 序

これまでキエルケゴール思想研究に従事してきたなかで、私が私なりに思い描くにいたった実存思想の核心について、マザー＝テレサを一つの事例として取り上げてこれを検討することによって、その信仰の息づかいからキエルケゴール思想上の信仰理念を掘り下げてみようと思う。手順としては、第一に、マザー＝テレサの信仰を、闇・神の不在・イエスの遍在といった事柄に集約する仕方で、紹介する（1～5）。第二に、そのように集約されたマザー＝テレサの信仰を私なりに解釈しながら表現しなおす試みをおこなうことによって、マザー＝テレサの信仰のなかの奥深くに潜む私たちと共有する実存的意味を見いだす（6）。そして第3に、そのようにして見いだされた実存的意味がキエルケゴール思想のうちにおいても、どのような仕方で見いだされるものなのかどうか、論じてみる（7～8）。

### 1. 闇

マザー＝テレサ（本名：アグネス＝ゴンジャ＝ボヤジュ Agnesë Gonxhe Bojaxhiu 1910-1997）は、神の存在を疑っており、そもそも神の存在を感じていなかつたのではないかというセンセーショナルな報道が2007年にBBCやCNNを通じてなされたことがあった。マザー＝テレサがその魂の深くに長年抱えていたであろう闇 darkness について一般的に知られるようになったのは、このときであった。BBCやCNNの報道は、マザー＝テレサにかんする或る著作を紹介するものであった。その著作はマザー＝テレサの魂ないしは信仰の闇 darkness についてきわめて大胆に明かしていたのであった。その著作とは、

*Mother Teresa -Come Be My Light- ·The Private Writings of the "Saint of Calcutta"-*, edited and commentary by Brian Kolodiejchuk, M.C., 2007, Image / Doubleday, である。本書には、その副題にあるように、それまで公開されなかったマザー=テレサの私的書簡やメモなどが多数納められている。おそらくその大半は、マザー=テレサ自身が決して公開されることを望まなかつたであろう文書類である。2007年本書はじめハードカバーが、次いでソフトカバーが刊行された。これらハードカバーとソフトカバーでは若干レイアウトの変更があり、ハードカバーには註や本文において明らかに校閲ミスと思われる箇所が散見される。ソフトカバーはこうしたミスを訂正したうえで、若干レイアウトを変更している。本発表ではそうしたミスを訂正しているソフトカバーを用いて、マザー=テレサの闇 darknessについて言及していく。本書は日本において未だほとんど紹介されておらず邦訳も刊行されていないので、原則として試訳に続けて原語である英語を併せて表記して、マザー=テレサの信仰の息づかいをより正確に本論文においても伝えようと思う。

本書出版の意図は、著者である Brian Kolodiejchuk<sup>\*1</sup>によれば、深い苦悩を抱えたマザー=テレサの信仰を紹介することを通して、多くの信仰者を励まし彼らに勇気を与えることにある<sup>\*2</sup>。本書冒頭には、マザー=テレサの以下の言葉が鑑文として掲げられている。「万が一私が聖人になることがあるとしても、私は本心から闇の聖人であろうと思います。私は、地上の闇の中に住まう人々の心に光をともすために、つねに天国は不在にしていることでしょう」 If I ever become a Saint – I will surely be one of “darkness.” I will continually be absent from Heaven – to light the light of those in darkness on earth.<sup>\*3</sup>。「闇の聖人」 Saint of darkness、「天国を不在にする」 be absent from Heaven とい

<sup>\*1</sup>著者ブライアン=コオロディエシュクは、Missionaries of Charity の神父であり、マザー=テレサ列福請願者である。これについては、ジャック=ゴティエ著『イエスの渴き—小さきテレーズとマザー・テレサ』伊従信子訳、女子パウロ会、2007年のうち、168頁から173頁参照。

<sup>\*2</sup>p.2 ff. and p.12 in *Mother Teresa -Come be my light- ·The Private Writings of the "Saint of Calcutta"-*.

<sup>\*3</sup>p. V in *Mother Teresa -Come be my light- ·The Private Writings of the "Saint of Calcutta"-*.

う言葉は、カトリック信仰のみならずプロテstant信仰のばあいであってさえ、正統教義による教会生活をもっぱら過ごしてきた者にとって、きわめて大胆な表現である。

著者 Brian Kolodiejchuk が、本書において「闇」darkness という言葉を深くかつ多義的にマザー=テレサの信仰や思想を象徴する言葉として理解していることは明白である。

## 2. 不在と遍在

マザー=テレサは、1948 年暮れにコルカタ（旧称カルカッタ）における路上奉仕活動を始めた。マザー=テレサによれば、「貧しい人のなかでももっとも貧しい人」the poorest of the poor のためのこの奉仕活動を始めた直後から、神に対する疑念が心のなかに生じたのであったが、この疑念を真に受け止めてくれる者を教会のなかで見いだすことができずにいたのであった。1961 年 4 月ノイナー Neuner 神父が、マザー=テレサの主催するコルカタにある Missionaries of Charity で黙想会を指導するために招かれた。このときノイナー神父は、マザー=テレサから悩みを打ち明ける私信を受け取った。そこには、信仰上の深い不安や極端な闇、神に見捨てられていると感じていることなどが吐露されていた。以下にその一部を引用する。

「…そして奉仕活動は始まりました。それは 1948 年 12 月でした。1950 年には多くのシスターが育ち、奉仕活動も進展しました。ところが神父様、1949 年もしくは 1950 年以来、恐ろしいほどの空虚さの実感が私を襲ったのです。この言葉にすることのできない闇、この寂寥感、神様を求めてやまない渴きが、私の心の深くに痛みを与えるのです。闇はそれほど強烈で、感情をもってしても理性をもってしても、私にはまったく理解できないのです。私の魂のなかにある神様の御座は、からっぽです。私のなかに神様はおられません。求めてやまない渴きの苦しみはきわめて強くて、私はひたすら神様を御慕い申し上げるのですが、私に感じられるのは、そもそも神様が私を望んでいらっしゃらないということ、そもそも神様が御不在であるということなのです。天国や靈魂といった言葉はまさにたんなる言葉に過ぎなくて、私には何の意味ももたないの

です。私の生活はとても矛盾に満ちています。私は人々の魂をお助けしているのですが、一体どこへ人々を私は導いているのでしょうか。一体なぜすべてがこうした具合なのでしょうか。私の生活において一体靈魂をどこに見いだせばよいのでしょうか。神様は私を望んではおられない。ときどき、私は私の心が「私の神様」と叫ぶのを聴くのですが、何も起こりはしないのです。この苦しみと痛みを、私は説明することができません」 And then the work started – in Dec.1948. – By 1950 as the number of the Sisters grew – the work grew. / Now Father – since 49 or 50 this terrible sense of loss – this untold darkness – this loneliness – this continual longing for God – which gives me that pain deep down in my heart.- Darkness is such that I really do not see – neither with my mind nor with my reason.- The place of God in my soul is blank.- There is no God in me. – When the pain of longing is so great – I just long & long for God – and then it is that I feel – He does not want me – He is not there. – Heaven – souls –why these are just words – which mean nothing to me. – My very life seems so contradictory. I help souls – to go where? – Why all this? Where is the souls in my very being? God does not want me.-Sometimes- I just hear my own heart cry out – “My God” and nothing else comes. – The torture and pain I can't explain\*<sup>4</sup>.

こうした激しい苦悶についてマザー=テレサは数ヶ月後には、ノイナー神父の助言をとおして、彼女なりの独特な理解に達している。1961年7月 Missionaries of Charity のシスターへ書き送った助言のなかでマザー=テレサは、以下のように述べている。

「私の親愛なる子供たち、私たちから苦しみがなくなってしまえば、私たちの奉仕活動は、ただの社会福祉事業になってしまいます。それはとてもよいことであり有用ですが、イエス=キリストの御業ではありませんし、決して贖罪になりません。イエス様は、私たちと生活を共にして孤独や苦しみや死を分かち合うことによって私たちを助けようと願われました。イエス様はご自身に

\*<sup>4</sup> p.210 in *Mother Teresa -Come be my light- .The Private Writings of the "Saint of Calcutta"*.

すべてを御背負いになって、漆黒の闇夜のなかを行かれました。私たちと一体になることによってのみ、イエス様は私たちを御救い下さいました。私たちは、イエス様がなさったのと同じことをするように許されています。貧しい人々のあらゆる悲しみ、たんに物質的な貧困ばかりではなくて靈的欠乏もまた救われなければなりません。そして私たちは、そうしたあらゆる悲しみを共にしなければなりません。そうすることが困難だと思うときには、次のように祈りましょう。「私は、神様からきわめて隔たりがありイエス様の光から背を向けるこの世界に生きようと願っています。それは、貧しい人々を助けて彼らの苦しみをいくらかでもこの身に背負うためなのです」。そうです、私の親愛なる子供たち、私たちは、貧しい人々の苦しみを共にしましょう。貧しい人々と一体になることによってのみ、言い換えれば、神様を貧しい人々の生活の場に御連れするとともに貧しい人々を神様のもとへ導くことによってのみ、私たちは彼らを救うことができるのです」 My dear children – without our suffering, our work would just be social work, very good and helpful, but it would not be the work of Jesus Christ, not part of the redemption.- Jesus wanted to help us by sharing our life, our loneliness, our agony and death. All that He has taken upon Himself, and has carried it in the darkest night. Only by being one with us He has redeemed us. We are allowed to do the same: all the desolation of the poor people, not only their material poverty, but their spiritual destitution must be redeemed, and we must have our share in it. – Pray thus when you find it hard – “I wish to live in this world which is so far from God, which has turned so much from the light of Jesus, to help them – to take upon me something of their suffering.” – Yes, my dear children – let us share the sufferings – of our poor – for only by being one with them – we can redeem them, that is, bringing God into their lives and bringing them to God\*<sup>5</sup>.

マザー=テレサは、神の不在・神から見捨てられていること・孤独や空虚や寂寥といった心情に日々さいなまれる極度の苦痛が、イエス=キリストもまた

\*<sup>5</sup> p.220 in *Mother Teresa -Come be my light- -The Private Writings of the "Saint of Calcutta"*.

かつてこの世界において人々の救済にさいして同様に体験したものであったと理解した。マザー＝テレサのこうした信仰は、徹頭徹尾イエスの十字架にまつわる信仰である。限られた制約のなかでできるかぎり多くの様々な資料に眼を通してみたが、マザー＝テレサの闇、すなわち、激しい苦痛を伴う靈的欠乏の心情は、1949年頃から死去するまで、程度の差こそあれ継続していたように思われる。闇がとりわけ苛酷であったときマザー＝テレサは、ミサのただなかにおいてさえ闇が消えることはなかった。しかし、ホスピアをいただいてイエス＝キリストと一緒にになる喜びだけは、マザー＝テレサから消えてなくなることは一時たりともなかった。また、教会にいるときにどれほど空しくとも、路上で貧しい人々と出会うとき、そこに必ずイエス＝キリストの臨在をマザー＝テレサは、実感してやまなかつた。イエス＝キリストは路上で生活する貧しい人々に遍在しているというのが、マザー＝テレサの実感であり続けた。

マザー＝テレサの闇について、十字架のヨハネ ((Juan de la Cruz, 1542-1591) の信仰や思想ときわめて類似していると多々指摘されている<sup>\*6</sup>。また、マザー＝テレサ自身が信仰の糧として、十字架のヨハネによる著作を熱心に読んでいたし、私信のなかに十字架のヨハネに関する記述を見いだすこともできる<sup>\*7</sup>。マザー＝テレサが熱心に読んでいたのは、「暗夜」「カルメル山登攀」「愛の賛歌」などであったろう。しかしながら、神学的にないしは護教的に、十字架のヨハネの思想との本質的類似性をマザー＝テレサの闇のうちに指摘することによって納得して満足するというだけの学問的営みは、まさに、マザー＝テレサの闇に息づく靈性の炎を打ち消してしまう悪魔の所業のように私には思われてならないのである。マザー＝テレサの闇は実存そのものであって、個人的体験を通して参与するほかに理解しようもないものである。

<sup>\*6</sup> ジャック＝ゴティエ著『イエスの渴き—小さきテレーズとマザー・テレサ』のうち、113頁以下参照。p.58ff. in *I Loved Jesus in the Night -Teresa of Calcutta, A Secret Revealed-*, by Paul Murray, Paraclete Press; p.22ff. in *Mother Teresa -Come be my light- -The Private Writings of the "Saint of Calcutta"-*.

<sup>\*7</sup> p.217f. in *Mother Teresa -Come be my light- -The Private Writings of the "Saint of Calcutta"-*.

### 3. 1946年の召命 —「私は渴く」—

マザー＝テレサの闇は、模範としてイエス＝キリストに倣い一体化するという信仰と不可避的に関わっている。マザー＝テレサのこうした信仰は、イエス＝キリストの声を聴いたことに端を発する召命に基づいている。それは 1946 年 9 月 10 日火曜日、ダージリン Darjeeling におけるロレット修道会 Loreto Convent の静修に年 1 回参加するためマザー＝テレサが列車に乗って旅をしていたおりのことであった。マザー＝テレサは、この出来事の子細について沈黙を守っていたが、後年次のように述べている。

「それは二度目の召命でした。とても幸せだったロレット修道会さえ放棄して、貧しい人のなかでももっとも貧しい人に仕えるために路上に出て行くことが神様のお与え下さった使命でした。まさにあの列車のなかで、私はすべてを放棄してイエス様にしたがってスラムに入っていって、貧しい人のなかでももっとも貧しい人のなかにおられるイエス様にお仕えする召命を聴いたのでした」… It was a second calling. It was a vocation to give up even Loreto where I was very happy and to go out in the streets to serve the poorest of the poor. It was in that train, I heard the call to give up all and follow Him into the slums – to serve Him in the poorest of the poor…\*8.

「それは 1946 年の今日でした。ダージリンに向かう列車のなかで神様は私に召命のなかの召命をお与えになり、貧しい人のなかでもっとも貧しい人のなかにおられるイエス様にお仕えすることによって、イエス様の渴きを満たす使命を受けたのです」 It was on this day in 1946 in the train to Darjeeling that God gave me the “call within a call” to satiate the thirst of Jesus by serving Him in the poorest of the poor\*9.

「「私は渴く」とイエス様は、十字架上であらゆる慰めから見放され、死に瀕

\*8 p.39 f. in *Mother Teresa -Come be my light- -The Private Writings of the "Saint of Calcutta"*.

\*9 p.40 in *Mother Teresa -Come be my light- -The Private Writings of the "Saint of Calcutta"*.

して絶対的な貧しさのなかでただ一人取り残されて、侮蔑のうちに心も体もぼろぼろになりながら、叫ばれました。イエス様は水を求めて渴いていたのではありません、愛と犠牲を求めて渴いていたのです」 "I thirst," Jesus said on the Cross when Jesus was deprived of every consolation, dying in absolute poverty, left alone, despised and broken in body and soul. He spoke of His thirst – not for water – but for love, for sacrifice... \*10.

マザー=テレサの迫真迫るイエスの渴きの叫びの描写は、後述するように、彼女自身が 1947 年に幻視したものであった。「貧しい人のなかでももっとも貧しい人のなかにおられるイエス様」 Him in the poorest of the poor という表現は、マタイによる福音書 25：31～45 に基づいている。「汝ら我が飢えしときに食らわせ、渴きしときに飲ませ、旅人なりしときに宿らせ、裸なりしときに着せ、病みしときに訪い、獄にありしときに来たりたればなり…わが兄弟なるこれらのいと小さき者の一人になしたるは、即ち我に為したるなり」（マタイによる福音書 25：35～40）という聖句をマザー=テレサは、イエス=キリストの言葉としてまさに文字通りに受け取っている。まさに「小さき者」・貧しい者のなかで苦悶しつつイエス=キリストは、観念的理念的愛とは極北に位置する実践的で血の通った愛を求めているというのが、マザー=テレサの理解である。マザー=テレサのイエス像は、万民のなかに遍在する一種汎神論的イエスであり、何かしらアニミズムや日本神道に通じるものがある。

#### 4. 1947 年の幻視 一ゴルゴダの丘と聖母マリアー

1947 年マザー=テレサは、1946 年の召命を裏づけるような幻視を体験した。マザー=テレサは、この幻視について 1947 年 10 月にペリエル Périer 大司教に宛てた私信のなかで次のように述べている。この幻視は、三つの次元から成り立っている。

「私は、大群衆を目の当たりにしました。あらゆる種類の人々、極端に貧し

---

\*10 p.41 in *Mother Teresa -Come be my light- -The Private Writings of the "Saint of Calcutta"*.

い人や子供たちもそこにいました。大群衆の中央に立っている私に向かって彼らはみな両腕を上げていました。彼らは、「来て、我々を助けて下さい、我々をイエス様のところにお連れ下さい」と叫んでいました」 I saw a very big crowd – all kinds of people – very poor and children were there also. They all had their hands lifted towards me – standing in their midst. They called out “Come, come, save us – bring us to Jesus.”

「それから、その大群衆はどの顔にも深い悲しみと苦しみが見て取れました。私は、彼らと向かい合っている聖母マリア様のおそばで、ひざまずいていました。私にはマリア様のお顔は見えませんでしたが、お声は聞こえました。「彼らのお世話をしなさい、彼らは私の者たちです。彼らをイエスのところにお連れしなさい、イエスを彼らのところへ行かせなさい。恐れてはいけません。彼らにロザリオの祈りを教えなさい。ロザリオの祈りにつながる者はすべて幸福になります。恐れてはいけません。イエスと私は、あなたとあなたの子供たちと共にあります」とマリア様はおっしゃいました」 Again that great crowd – I could see great sorrow and suffering in their faces – I was knelling near Our Lady, who was facing them. – I did not see her face but I heard her say “Take care of them – they are mine. – Bring them to Jesus – carry Jesus to them. – Fear not. Teach them to say the Rosary – the family Rosary and all will be well. – Fear not – Jesus and I will be with you and your children.”

「同じ大群衆が闇に覆われていました。十字架からは離れていましたが、私は幼子の姿でマリア様の御前におりました。マリア様の左手が私の左肩に乗っていました。そしてマリア様の右手が私の右腕をつかんでいました。私とマリア様は共に、十字架と向かい合っていました。私たちの主イエス様はおっしゃいました、「私はあなたに求めている、彼らもあなたに求めている、私の母もあなたに求めている。あなたは、彼らを世話して彼らを私のところに連れてくるつとめを私のためになす事を拒むのか」と。私は答えました。イエス様、あなたはご存じです、私はすぐにでもこのつとめをおこなう用意ができていることを」 The same great crowd – they were covered in darkness. Yet distance from the Cross – and myself as a little child in front of her. Her left hand was

on my left shoulder – and her right hand was holding my right arm. We were both facing the Cross. Our Lord said – “I have asked you. They have asked you and she, My Mother has asked you. Will you refuse to do this for Me – to take care of them, to bring them to Me? ”, I answered – You know, Jesus, I am ready to go at a moment’ s notice…\*<sup>11</sup>.

マザー＝テレサの幻視は、ヨハネによる福音書 19：28 にある十字架上でイエス＝キリストが叫んだ「我渴く」という場面そのものであり、その場面に聖母マリアと共に一人の幼子としてマザー＝テレサ自身が居合わせているのであった。

## 5. マザー＝テレサの思想

マザー＝テレサの信仰思想の特徴について、ドキュメント映画『マザー＝テレサー母なる人の言葉－』 *Mother Teresa: The Legacy*（制作・監督：アン＝ペトリ、ジェネット＝ペトリ、2004 年、アメリカ）が簡潔にまとめている\*<sup>12</sup>。このドキュメント映画によれば、マザー＝テレサの信仰は、愛の神祕と象徵としての笑顔・貧困の遍在性・ゲッセマネの苦悶と心の貧困・小さな行為と無限の愛・宗教性や人種などあらゆることに制約されない人間の内なる神聖性・イエスの渴き・人間に内在する神聖を破壊する悪魔・謙虚と柔軟・愛し愛される人間の本性・聖化・イエスの遍在として、まとめることができる。これらの特徴のうちとりわけ注目すべきなのは、ゲッセマネの苦悶と心の貧困・人間の内なる神聖性・神聖を破壊する悪魔・聖化・イエスの遍在、である。

マザー＝テレサにとって、「神よ、どうして私をお見捨て給うのか」（マタイ

\*<sup>11</sup> p.99 in *Mother Teresa -Come be my light- -The Private Writings of the "Saint of Calcutta"-*; p.19ff. in *Mother Teresa in the Shadow of Our Lady -sharing Mother Teresa's Mystical Relationship with Mary-*, by Joseph Langford, MC, Our Sunday Visitor Publishing Division, 2007; p. 88ff. in *Mother Teresa's Secret Fire -The Encounter that Changed Her Life, and How It Can Transform Your Own-*, by Joseph Langford, Our Sunday Visitor Publishing Division 2008.

\*<sup>12</sup> DVD、発売元株式会社プレシディオ、販売元ジェネオンエンタテインメント株式会社、GNBF-7510。

による福音書 27:46) という十字架上の叫びは、十字架上での叫びではなくて、それに先立つゲッセマネの園で血をしたたらせ苦悶の祈りをおこなったときの、イエスの心の叫びに他ならない。マザー=テレサ自身が、召命によって路上での奉仕活動を始めた直後から死去するまでおそらく一貫して抱いていた苦悶の闇は、このイエスの心の叫びと重なるのである。この事柄の核心は、神学的一形而上学的解明にあるのではなくて、まさにこの言い知れぬ苦悶を共有することなのである。そのようにしてしか、救いは成就しようがないのである。

マザー=テレサによれば、神の御愛のもとでは、肌の色・人種・国籍・宗教や主義主張は何ら制約とならない。ヒンズー教徒・イスラム教徒・ユダヤ教徒・仏教徒・キリスト教徒・共産主義者・無神論者・男性・女性・大人・子供など、すべての人が神の子であり、すべての人が神聖性を表している。重要なのは、そうしたすべての人々のなかに臨在しているイエスに実際に触れることである。

悪魔は実在し、神を憎んでいる。悪魔の狙いは、人間に内在する神を破壊することである。金銭・名誉・権力が内在する神の代償になっており、内在する神が消失し、きわめて深刻な靈的貧困が起こっている。

沈黙の果実は祈りであり、祈りの果実は信仰である。信仰の果実は愛であり、愛の果実は奉仕であり、奉仕の果実は平和である<sup>\*13</sup>。祈りを堅持することによって心を誰もが清くすることができるし、またそうしなければならない。心を清くすれば誰もが、神を見ることができる。それが聖化である。

パンも貧しい人々も、イエス=キリストである。イエス=キリストへの愛の実践は、貧しい人々のなかのイエス=キリストに仕えることに他ならない。我々が是非知っておかなければならないことは、生前の行いによって死後裁かれるということである。

<sup>\*13</sup> p.315 in *Mother Teresa -Come be my light- -The Private Writings of the "Saint of Calcutta"*.

## 6. 閣の秘密ないしは実存性

マザー=テレサは、闇 darkness の苦悶の何であるかを伝えようと私信のなかで試みている。この闇は、どれほど祈ってもまたどれほど愛を求めて、何ら応答なく見捨てられたままの深い孤独である<sup>\*14</sup>。この闇は底知れず、この底なしの闇に対して信仰 faith も情熱 love も信頼 trust も祈り pray も無力である<sup>\*15</sup>。「…イエス様が完全に私のなかで生きていただけるほど、清くあろうと私は望んでいます。私がイエス様を求めようとすればするほど、それだけます私は望まれなくなるのです」… to be holy in such a way that Jesus can live His life to the full in me. The more I want Him –the less I am wanted<sup>\*16</sup>。

十字架のイエスを愛することは、十字架をとおしてイエスがおこなった贖罪を、自分もおこなうということである。贖罪とは、他人の罪を身代わりとして背負うということである。現代社会風に云えば、泥をかぶるということに他ならないであろう。泥をかぶれば、それが内々にはどれほど高潔な行為であっても、社会的には制裁や処罰を被るのである。いったん泥をかぶると、しばしば、泥を作った張本人やそれにかんする事情を知っている周囲のごく親しい人々からさえ、裏切られ、疎遠になるのが社会の現実である。玉砕や特攻といったかつての戦争体験<sup>\*17</sup> や現代の企業や学校における仕事の軋轢や言うに言われぬ自殺には、泥をかぶったがゆえの苛酷な苦悶が後を絶たないのでないだろうか。泥をかぶれば、泥を作った張本人以上に泥をかぶった人間の方がそもそも、社会から忌み嫌われるのである。一度泥をかぶってしまうと、泥をかぶった人間が、当初淡く想像し期待していたような周囲からの同情や感謝どころか哀れみの一片さえ、得ることはない。捨て去られるだけである。これが

<sup>\*14</sup> p.187 in *Mother Teresa -Come be my light- -The Private Writings of the "Saint of Calcutta"-.*

<sup>\*15</sup> p.187 and 193 in *Mother Teresa -Come be my light- -The Private Writings of the "Saint of Calcutta"-.*

<sup>\*16</sup> p.164 in *Mother Teresa -Come be my light- -The Private Writings of the "Saint of Calcutta"-.*

<sup>\*17</sup> 津本陽著『名をこそ惜しめ—硫黄島魂の記録—』文藝春秋、2005年参照。

泥をかぶるということに他ならない。贖罪、現代社会風に云えば泥をかぶることとは、この世に生きているかぎり、誤解され侮蔑され無視されることに他ならないだろう。たしかに、人は一人では生きられない。人は、何らかの仕方で支え合わなければならぬ。何からの仕方で、他人に泥を塗りかつ他人の泥をかぶるということ抜きにして実生活は、成立しない。それがこの世の人生であり習いである。この実存的状況に合理性など一切ない。マザー=テレサの間の実存性はまさにこうした世の習いを語りかけているように、私には思われてしかたがない\*<sup>18</sup>。

マザー=テレサは、受胎のマリアの慎ましさ *humidity* (ルカによる福音書 1:39~56) に学ぶようにと、Missionaries of Charity の共労者に書き送っている。母性の慈愛という一筋の光明がここに示されている。人はこの世の人生の不合理の極みのなかで、いわば観世音菩薩の慈悲心にも似た笑みやぬくもりや眼差しに、癒されるのである。ただしそれは、日常の些事、しかも家族や家庭内におけるごく小さなことから始まる。何からの仕方で、他人に泥を塗りかつ他人から泥をかぶるということ抜きにして実生活は、成立しない。それは、こうし

---

\*<sup>18</sup> マザー=テレサの部屋のベッドの脇の壁に貼られていた手書きの覚え書きには、次のように綴られていた。マザー=テレサの生の人間洞察がきわめて興味深い。

People are unreasonable, illogical, and self-centered;  
forgive them anyway.

If you are kind, people may accuse you of selfish, ulterior motives;  
be kind anyway.

If you are successful, you will win some false friends, and some true enemies;  
be successful anyway.

What you spent years building, someone could destroy overnight;  
build anyway.

If you find serenity and happiness, others may be jealous;  
be happy anyway.

The good you do today, people will often forget tomorrow;  
do good anyway.

Give the world the best you have, and it may never be enough;  
give the world your best anyway.

In the final analysis, it is between you and God. It was never between you and  
them anyway.

た家族や家庭内における日常の些事のなかではじめて、我々に実際に受け止められ受容されるのではないだろうか。

## 7. 現代の闇の実存性とキエルケゴールにおける卑賤のイエス

贖罪とは、現代社会風に云えば、繰り返しになるけれども、この世に生きているかぎり、誤解され侮蔑され無視されることに他ならないということである。少なくとも、そのように試みに定義することによって、現代における贖罪をめぐる実存性の核心に迫ってみたい。また、現代社会において贖罪の実存性をより伝えやすくするために、試みに「泥をかぶる」という言葉を使って贖罪を表現することにする。ところで、「泥をかぶる」者はただひたすら、泥をかぶるだけなのかと云えば、そうではない。人が一人では決して生きられない以上、人は何らかの仕方で支え合っているわけであり、支え合っているということはすなわち、たんに泥をかぶるだけではなくて、何らかの仕方であるにせよ、他人に対して泥を塗ってもいるということになる。人は一人では生きられないということは、要するに、人は何らかの仕方で他人に泥を塗ると同時に他人の泥をかぶるということであって、それが日常生活の実存性であり、贖罪の深みを考慮すれば、その実存性すなわち「泥を塗りかつかぶる」ことは、限りなく深く核心的であり、実人生の本質であるということになる。けれども「泥を塗りかつかぶる」ということは、はなはだ不合理なことである。そもそも、泥をかぶると云うこと自体が不合理である。なぜなら、泥をかぶる者は、誤解され侮辱され無視されるという悲惨さを不当なことと感じ考えるであろうし、そのような感じ方や考え方には、生身の身体をもって現代というはなはだストレスを被ることから離れがたく拘束される社会を生き抜く者であれば、誰もが皆多少ともあれつねに懐いているのであって、こうした感情や思考を不道徳ないしは反倫理的であると非難するのは、むしろ皮相な理解でしかないように思われるからである。人間存在の罪性を指摘したとして、泥をかぶることの不合理さを甘受する者はいないであろう。またたとえ、自由意志によって自ら十全に決断して、泥をかぶることを引き受けたといったばあいであっても、その結果自らにこうむる泥の質量は必ず、決断したときに予期していた質量を超えていくのがつね

なるがゆえに、すなわち、あらかじめ予期して覚悟していた以上に泥をかぶるのが習いであるがゆえに、泥をかぶることの不当性を吐露するに違いないのである。泥を塗るということもまた、不合理である。現代社会は、近代的自我に基づいて自覚的に自他に対して責任を負うことのできる人間を前提としており、そうした人間を構成員として前提したうえで、仕組みが形成されている社会である。近代的自我にもとづいて自覚的に自他に対して責任を負う人間とは、決して自分の泥を他人に塗ることをしない人間のことである。したがって、現代社会が破綻しないかぎり、泥を塗るという事態は不合理である。現代社会は実際には、自覚的に自他に対して責任を負うことのできる能力以上の負荷を我々に強制しているため、我々は実際には責任を負いきれず、泥を塗るという事態が何らかの仕方で、出現している。しかしそれは、現代社会が能力以上の負荷を我々に強制するがゆえであり、我々は、我々の本心から他人に泥を塗っているのではなくて、いわば、そうせざるを得ない状況に追い込まれて止むに止まれず他になすすべなく、他人に泥を塗るようにさせられているのであって、本心から好んで自分からすすんで他人に対して泥を塗るわけでは断じてない、そのように我々は感じ考えているであろう。すなわち、現代社会が我々に先立つて、不合理なのであり、現代社会それ自体が人々に対して泥を塗っているのであって、我々は否応もなく、そのことに関与させられているに過ぎないというように、我々は感じ考えているであろう。要するに、泥をかぶることと泥を塗ることはそれぞれ不合理なことであり、況んや、泥を塗りかつかぶることを甘受することは、我々には困難である。

泥を塗りかつかぶることを甘受することは我々には困難であるが、不思議なことに我々は、実存的事態としてはそうしたことが我々の周囲で実際には起こっているであろう、と予感しているし、うすうす感じ取っている。実人生が泥を塗りかつかぶることの繰り返しであるという事実を、そもそもまったく理解できなければ、人間の悲喜劇を物語る文学作品を理解することは不可能であろう。泥を塗りかつかぶることという実存的事態は、不合理であり不当であるけれども、こうした不合理であり不当なことが実人生においては不可避的につきまとっている事実は、成熟した社会人であれば、誰もが認めるであろう。

以下、キエルケゴール思想における贖罪について若干考察を試みるが、現代社会における実存的事態や事実の延長線上で、泥を塗りかつ泥をかぶるという表現を介して、実存的に考察してみたい。つまりキリスト教の教義から拘束されずに自由に、あくまで実存性に力点を置いて考察してみたい。

キエルケゴール思想の主要概念において、泥を塗りかつかぶることの不合理さは、神一人としてのキリスト＝イエスに対する躊躇に類似しているであろう。キリストは泥を塗らないし、泥をかぶる必要もないではないか、という批判があるかもしれない。しかし、イエスの十字架上の叫びである「神よ、どうして私をお見捨て給うのか」という言葉の圧倒的耐え難さは、その叫び主がキリストという神に他ならないからである。神が神を見捨てる、ないしは、神が神によって見捨てられるという事態が現実に実存的事実としてあるということを、この叫びははっきり示しているのであり、この贖罪の実存性は、人間の贖罪のみならず神の贖罪さえもキリストが背負っていると云うこと、さらに言えば、この贖罪の圧倒的耐え難さはキリストが神の泥をかぶっていると云うこと、少なくともこの叫びをとおして明白であるのはキリストの苦難の真実が、神からもたらされている泥をどこまでもぬぐいがたくかぶり続けなくてはならない耐え難さとして示されていることにある。キエルケゴール思想におけるイエス＝キリストに対する躊躇は、実存的に峻厳に考察すれば、我々のイエス＝キリストに対する躊躇であるとともに、イエス＝キリストのイエス＝キリスト自身に対する躊躇でもある。イエスは、その神性のゆえに神の泥をかぶるのであり、その耐え難さに苦悶するのであり、我々人間は、神に見捨てられるキリストの無残さと愚かさと慘めさに苦悶するのである。

このような、キリストが人間と神の双方から泥をかぶるという実存的事態を認めるにしても、キリストが泥を塗るということはあり得ないのでないのではないか、という疑問が起こるであろう。キリストが泥を塗ると云うばあい、キリストが泥を塗る相手は人間である。贖罪においてキリストは、神から泥を塗られるわけであって、そのことを受け止めてキリストは苦悶するのであるから、キリストが神に泥を塗り返すということは考えにくい。キリストが泥を塗るとすれば、それは人間に対してであって神に対してではない。しかし、キリストが人間に

泥を塗るという事態は一体何を意味しうるのか。それは当然のことながら、キリストが人間に対して罪を犯すといった意味ではない。キリストがかぶる泥は神からもたらされているがゆえにまことに耐え難いものであるが、そのキリストは同時にイエスであり人間であり有限である。キエルケゴール思想におけるイエス＝キリストは、天と地が逆反照するという原理にしたがって、天上において至高の神である者は地上においては最も低い者として現れるゆえに、現実社会においては卑賤のイエスとして強調される。マザー＝テレサは、卑賤のイエスの有様を「私は渴く」という言葉で表現していた。キエルケゴール思想において卑賤のイエス像は、信仰生活の模範であり、卑賤のイエスに倣った生き方をするのが信仰者の理想である。キリストが人間に泥を塗るということは、人間が神の泥をかぶることを、言い換えれば、神の泥をキリストとともにかぶる共労者となるように人間に求めて止まないと云うことである。繰り返すが、キリストは人間イエスでもあり有限でもあるゆえに、神からもたらされている泥をただ一人で受け止めることはなしがたいのである。人間は、キリストをとおして、神の泥をかぶる共労者であることを求められているのである。

## 8. 神は不在であるがゆえに遍在する

こうした現代社会の実存性に引き寄せた解釈は、キリスト教教義から見れば誠に愚かであろう。けれども、そもそもキリストがかぶる神の泥とは何なのかということに思いを寄せれば、理解はずつと容易になるようと思われる。キエルケゴール思想において贖罪はいわば、愛と罪、正と負、慈愛と邪惡の二重の弁証法として織り込まれているように思われる。神の泥は慈愛であり、神は人間に対する限りない慈愛のためにキリストを見捨てたのである。キリストはその神の慈愛の底深さと力強さにゆえに苦悶するのであり、卑賤のイエスの姿をとおして、自らの内なる神性に覚醒した人間に対しても、神の慈愛を甘受する共労者となることを求めるのである。それこそが、キリストが人間に対して泥を塗ることの実相である。キエルケゴール思想において贖罪とは、人間が一方的にキリストに対してただひたすら泥を塗ることではないのであって、キエルケゴール思想において贖罪は、天と地の逆反照のごとく、キリストが自らの内

なる神性に目覚めた人間に対して泥を塗ることもある。それが卑賤のイエスという道に通じているのである。

ところで、神の慈愛というのは一体何であろうか。実存的に解釈すれば、邪悪なもの一切を善なるものと等しく受け止め育み、聖化するということではないだろうか。そんなことは、人間にできるはずがない。だからこそ、神が為さなければならぬ愛なのだ。果たして、そうだろうか。神の慈愛は、すべての人々に、それも世代から世代へと継承されて持続される仕方で、実践するように促されているように思われる。神の慈愛が無限であるゆえに、促されているのはすべての人々であり、すべての世代に対してであるように思われる。神の慈愛は、憎悪や恨みをひたすら肥大化させて止まない負の連鎖を産み出す我々人間に対する宿業であると云える。邪悪さは負の連鎖として継続していく。キリスト教の教義においては罪の遺伝という解釈も成り立つのかもしれない。けれども、実存的に解釈すれば、人間の邪悪さは復讐や応酬の連鎖を産み出す。なぜなら、人間の正義は伝統的に応報主義に依拠してきたからである。「眼には眼、歯には歯」である。応報主義の正義は、予防としてこそ意義がある。人を殺せば、いずれ殺される。だから人を殺してはならない。これが予防的意義である。けれども、殺害された家族の復讐のために、たとえ自分が死刑になっても、家族を殺害した者を殺すということになれば、もはや応報主義の正義は成立せず、かえって応報主義は邪悪化する。

神の慈愛は、邪悪の連鎖を産み出す人間に対する宿業である。邪悪の連鎖を産み出して、他人や神に対して邪悪な泥を塗る者は、神やイエスから慈愛の泥を塗られるのである。一体、どちらのほうがより苦難が険しいであろうか。邪悪の泥をかぶるほうであろうか。それとも慈愛の泥をかぶるほうであろうか。邪悪の泥をかぶることはたしかに悲惨なことである。けれども我々は、復讐することによって邪悪の泥の悲惨さを一旦忘却し解消することができる。いずれ泥を再びかぶるにしても、また人知れず復讐すればよいというのが、我々の世間知ではないだろうか。しかしながら、慈愛の泥をかぶるということは邪悪を甘受しても復讐しないということである。復讐しないのは人間にとって耐え難い。したがって慈愛の泥をかぶるほうがより苦難は険しいのである。「キリスト

ト教の修練』第一部の副題に「覚醒と内面化のために」と記されているけれども、覚醒というのは、自らの内なる神性に気づくということであり、自分の心のなかでその神性が成長していくことが内面化の意味であると思う。

慈愛の泥をかぶるということは、邪悪の泥を塗り止めるということになる。どんなにつらいとしても人間であれば、邪悪の泥を塗り止められるはずである。なぜなら、真心から邪悪の泥を塗り止められない者は、悪魔のみだからである。真っ当な人間ならば感謝するあたたかな心をどこかにわずかでももつが、悪魔は怜俐な計算しか働かないのである。感謝するあたたかな心、それこそが真正なる勝義の神の属性であり、我々の内なる卑賤な神の姿であろう。超越神が不在化することによってのみ、内なる神が我々のなかに遍在化し始めるのではないだろうか。